



Comptes amoureux 研究(3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006117

Comptes amoureux 研究 (3)

鍛 治 義 弘

Comptes amoureux『恋の物語』の最も重要な、ほとんど唯一の主題は、恋愛である。その観念をマドレーヌ・ラザールのようにフェミニズム的に解釈するか¹⁾、レイノルズル＝コーネルのように男に都合のよいものと見るか²⁾ は見解が分かれるところである。恋愛を中心とする女性論は15世紀から16世紀にかけて特に流行の主題であり、『恋の物語』における扱いを歴史的に検討しようとするならば、少なくとも15世紀初頭のクリスチーナ・ド・ピザンらによる『薔薇物語』論争から16世紀中葉のフランソワ・ド・ビヨンの『難攻不落女徳之砦』までの女性論争の中での位置付けが必要であろう。本論のような小論においてはこうした大きな扱いをする余裕はないので、ここでは別の接近法をとろう。現在までほとんど注目されていない同時代の一作品との比較によって、『恋の物語』における恋愛の主題を明確にするという方法である。

その一作品とはファン・デ・フローレス Juan de Flores 作の『グリマルテとグラディッサ』*Grimalte y Gradissa* のモーリス・セーヴによるフランス語訳『フィアンメッタの痛ましい最期』である。この選択は全く恣意的というわけではない。『恋の物語』の作者はジャンヌ・フロール Jeanne Flore となっているが、この女性についてはこれまでの探求にも拘わらず、いまだにその身元は同定されていない。それゆえ Matulka³⁾ のように、この作者名をファン・デ・フローレスから借りて来た筆名だと見なすことも全く不可能ではないだろう。さらに『恋の物語』の異本『蔑ろにされたアモルの罰』(以下『アモルの罰』と略す)と『フィアンメッタの痛ましい最期』はともにリヨンのフランソワ・ジュストとパリのドニ・ジャンノによって刊行されているのである⁴⁾。

しかし何よりも両者を関連付けるのは、両作品の冒頭に掲げられた詩句である。

HUICTAIN

Bien paindre sceut qui fait amour aveugle
Enfant, archier, pasle, maigre, volaige,
Car en tirant ses amans il aveugle,
Et plus que enfans les faict molz de couraige,
Pasles par cure, et maigres par grand raige,
Plus inconstant que Pamphile au desert,
Donc, o lecteur, celluy n'est pas bien saige
Qui pour aimer est de son sens desert.

SOUFFRIR SE OUFFRIR.⁵⁾

MADAME EGINE MINERVE AUX NOBLES DAMES AMOUREUSES

Gardez vous bien du Saint Amour offendre,
Lequel n'est pas comme on le painct, aveugle :
Sinon en tant que les Cruelz aveugle,
Qui n'ont le cueur entier, piteux, et tendre.
Le voilà jà tout prest de son arc tendre
Contre qui n'ayme usant du malefice
De Cruaulté : doncques au saint service
D'amour vueillez de bon vouloir entendre.⁶⁾

この二つの詩句はいずれもアモルを主題とする、ほぼ女性韻からなる10音節の8行詩であり、セーヴはアモルを盲目とする (souffrir se ouffrir の銘句から知られるようにこの詩句はセーヴのものであり、後に『デリー』にも一部の語句を変えて収録される。『デリー』XXXVII) が、他方は「描かれているように」は盲目でないとする。後者のこの部分がセーヴの語句を念頭において発せられたことは、Pérouse と Baril の指摘する通りである⁷⁾。そして「だから」以下の読者への呼びかけも対照的となる。

このようにこの二つの詩句の関連は明白で、その主張するところは対照的となるが、両作品全体には関連はないのだろうか。少なくとも両作品の比較対照によって『恋の物語』『アモルの罰』の主題がいつそう明らかになりはしないだろうか。私たちは以下にこの比較を行ってみよう。私たちは先に『アモルの罰』が『恋の物語』に先行するとの仮説を提示しているので⁸⁾、この比較は『フィアンメッタの痛ましい最期』と『アモルの罰』の間で行う。

フワン・デ・フローレス作『グリマルテとグラディッサ』はボッカッチョの『フィアンメッタ』 *Libro chiamato Elegia di madonna Fiammetta* から影響を受けて、いわばその続編として書かれた作品である。心理小説の原型とも見なされるボッカッチョのこの作品は自身のナポリでの体験をもとに1343年頃に書かれたと考えられるが、1472年パドヴァでまずラテン語訳が出版され、1481年にヴェネツィアでイタリア語版が刊行された。16世紀にはフランス語に翻訳され、世紀の前半に四つの版が刊行されており⁹⁾、フランスでもかなり広く知られていたと考えられる。

フワン・デ・フローレスは、ナポリの名家の美しいフィアンメッタという女性が、幸福な結婚にもかかわらずパンフィロという名の異国の若者と恋に落ち、パンフィロがフィレンツェに帰郷してしまった後、失われた恋を嘆く、という話の、いわば後日談を作り上げたのだが、現代ではほとんど知られていない作品であろうから、まずはその梗概を述べておくことにする。

物語はボッカッチョのものを背景として展開する。グリマルテは自ら選んだ婦人グラディッサに長い間献身的に奉仕して来ている。しかしグラディッサは彼の全努力に冷淡なままである。フィアンメッタの回状を読んだグラディッサは男への不信を正当化するが、忠実なグリマルテに報いなければならないので、フィアンメッタとパンフィロを見つけ、両者を和解させること

を求める。グリマルテはこの務めが大変困難であると感じながらも、引き受け、旅立つ。彼は長い間迷ったあげく、人里離れた山への道で、美しい婦人に出会うが、それがフィアンメッタであった。二人は共にパンフィロを探して旅し、とうとうフィレンツェに到達する。そこでパンフィロが家族と暮らしていることを知る。フィアンメッタは都市の近くの僧院に宿をとり、自分のもとへ戻るよう嘆願する手紙を書き送る。パンフィロは道徳的な返事を返すばかりである。フィアンメッタはこの冷たい返事に傷つき、グリマルテをパンフィロのところに送り、自分と会うよう説得させる。少し議論した後、グリマルテはパンフィロを連れて来ることに成功するが、パンフィロはかつての恋人に冷たく無関心なままで、少しの愛も見せることなく立ち去る。フィアンメッタは絶望と怒りの間で揺れ、すべての男を呪い、自分の浪費された人生を嘆く。悲しみは大きく、彼女はすぐに死ぬ。この死をグリマルテは深く悲しみ、毛を引き抜き、身を引きちぎるほどである。幾分気を取り戻すと、葬儀の準備をし、壮大な墓を建てさせ、フィアンメッタのあわれな運命を表す象徴的な浮き彫りで飾らせる。この悲しい死の仇を討つためにパンフィロに決闘を挑むが、悔恨に苦しむパンフィロは戦いを拒み、贖罪のために砂漠に引きこもる決心をする。グリマルテはスペインに戻り、フィアンメッタの死とパンフィロの後悔についてグラディッサに手紙を書く。彼女は死の知らせを聞くと、深く悲しみ、決して愛さない決心を固める。こうしてグリマルテはグラディッサの好意をえることが絶望的だと悟る。それでパンフィロを探し、生活を共にしようとする。遠くまで27年間も探し回ったあげく、アジアの山中でパンフィロの噂を聞く。今や野人となっている彼を捕獲するためには、犬で狩り出さなければならない。捕らえられたパンフィロは人間というよりは獣に近く、四足で歩き、裸体を長い体毛で覆い、肌は黒ずんでいる。彼はまた沈黙の誓いを立てており、グリマルテが野生の生活を共にする印を見せてようやく話す。二人は同じ恐ろしい生活を送り、自分たちの悲しい生を涙と嘆きに捧げる。一週に二度二人はフィアンメッタの幻影に苦しめられる。グリマルテはグラディッサへの非難を厳しい手紙で述べ、今も抱いている献身を保証し、こうして陰気な悲劇的調子で物語は突然終わる。

セーヴがこの作品をフランス語に翻訳し出版したのは、ボッカッチョの原作のフランス語訳がかなりの評判をとっていたことによると考えられ、スペイン語の表題を大きく変更してフィアンメッタの名前を前面に出している。セーヴのフランス語訳は原文の展開をそのままどってはいないが、変更や誤訳もあるようだ。Matulkaによれば、スペイン語の原典に含まれるアロンソ・デ・コルドバの詩句と章の結論の文を省略し、「墓」の章を短縮し、理解の及ばぬところは言い換え、誤訳や付加もあり、むしろ自由訳であるが、できるだけ原文に近くあろうと務めてはいる¹⁰⁾。

恋愛の主題を検討する前に、作品の構造について一言しておこう。先に見たように、『グリマルテとグラディッサ』ではパンフィロとフィアンメッタの恋愛問題を核として、グリマルテとグラディッサの関係はこの核の關係に影響を受けて展開する。いわば核が内の話で、グリマルテとグラディッサの物語は外の物語として定位するように、二重の物語となっているのだ。そしてこの二重の物語を通して読者に働きかける、そうした構造を持つ。一方『アモルの罰』は語り手の異なる四つの物語を持つが、いずれも美しく高慢な者が愛を寄せる者をつれなく退

け、ウェヌス、アモルに罰せられる話であり、この教訓は杵物語の中の登場人物セビルに向けられており、最期にセビルは罰を受けるのである。この場合も語り手の語る物語が外の杵物語に影響を与える。そしてさらに読者に働きかける。このように構造の上で『グリマルテとグラディッサ』と『アモルの罰』はきわめて類似している。

Matulkaはフローレスの『グリマルテとグラディッサ』における愛を悲しい情熱¹¹⁾、暗い情熱¹²⁾とし、この物語を「すべての愛が導く、悲しみ、幻滅、死を描くドラマ」¹³⁾としたが、セーヴのフランス語訳においてもこの暗い主調音は、フィアンメッタの導入の折にすでに聞かれる。

ceste dame fust l'une de celles, qui an aage et valleur les aultres excedoit, par ainsi elle estant conjointe en mariage avecques son convenable party se reputoit la plus heureuse de son temps, mais comme sont communement variables les dispositions de fortune, elle suyvant la vergoigneuse lascivité, et regectant l'honneur voire fourvoyée de la droicte amour de son vaillant mary avecque ung estrange homme nommé Pamphille fut surprinse d'amour. (p.427)

フィアンメッタは、優れた性質、そして適切な結婚にも拘わらず、「恥ずべき淫蕩」に従い、「この愛の致命的一撃」ce coup mortel d'amour (p.450)によってパンフィロと恋に落ち、名誉と夫との正しい愛を打ち捨ててしまったのだ。それゆえパンフィロに捨てられたフィアンメッタの嘆きは必ずしも一方的に同情すべきものとはならず、探し出されたパンフィロとフィアンメッタの書簡および対面での対決は非難の応酬となり、そこでパンフィロの非難を通して、この作品での愛の観念が窺われる。パンフィロはフィアンメッタの行為を、「過度の欲望と軽薄な意思」tes desordonnez appetitz et frivolles voluntez (p.465)と決め付け、さらには次のように述べる。

Et ta insensée amour et bruslante fantasie te devoient desjà souffire, ou du tout consommer. Car selon le long temps que en tes plaisirs tu as eu abundante jouissance, contenter tu te devrois. Speciallement que pour toy estre liée au lien de mariage, tu ne devrois appeter de estre une esclave de tes desirs, mesmement en estranges terres.(pp.471-472)

フィアンメッタの恋愛は、快楽や欲望を求める常軌を越した恋愛とされ、フィアンメッタは「敵である」アモルに騙し続けられ、「心からの愛によるよりも肉の欲望に打ち負かされたままである」plus par desir charnel, que de cordialle amour, tu t'es laissée vaincre (p.449)と非難される。

またパンフィロの言うには、自身やフィアンメッタ、それに従う人を騙す恋愛は理性と対立するものであり、一時的なものであるはずである。

Car alors comme hors du sens je disoys ce qu'il me sembloit, et à ceste heure que je congois entierement la raison, verité et conscience m'obligent de te oster hors de chemin, que tu ne puisses estre trompée de ce tyrant et cruel amour, non seulement toy, mais tous ceulx qui le veullent ensuyvre, et ne croy qu'en ce temps

là je te disoye autre chose, sinon ce qui estoit en ma volonté. Car non moins que toy mesme je le croioye, pour estre aussi bien trompé d'icelluy amour que toy mesme. Et toutesfoys (jà comme tu me disoys qu'il n'y amour là où il n'y a point d'affection) juste sentence s'en doibt prendre. (...) Par ainsi notre amour ne devoit estre perpetuelle, ains devoit avoir fin, (...) Toutesfoys j'ayme mieulx souffrir et endurer en m'efforceant contre les flammes d'amours, qui sont abregement de vie et d'honneur, que d'accomplir ta volonté. (p.466)

こうした非難に対してフィアンメッタはもっぱら戻ってくるとの約束をたてにパンフィロをなじることしかできないが、フィアンメッタ自身も「恋愛から決していい結果が出てこないこと」que d'amours il ne sourtist jamais bonne fin (p.441)を理解しており、自分の不幸を公にしたのも、「男たちのごまかしを避けるようにより賢明になるように女性が将来の手本とすることができる」possible sera que aucuns y prendre exemple à l'advenir, pour estre plus saiges à scavoir eviter les tromperies des hommes (p.441) ようにであったのだ。

こうした『フィアンメッタの痛ましい最期』での恋愛に対して、『アモルの罰』では恋愛は何より情熱であり、炎や熱の語彙で表現される¹⁹⁾。そこには愛を退けられた者の嘆きを除いては、内面的な心の動きはほとんどなく、対象の持つ視覚的な美と優美さによって喚起される炎、熱が問題であり、その対象を求める欲求、それによって齎される快楽が重要である。そして何よりこうした欲望、快楽は否定されるべきものではなく、こうした情熱を吹き込む全能のウェヌス、アモルの力に従わねばならない。メデューズの言葉に従えば次のごとくなる。

Combien que souffisamment, cheres et amoureuses compaignes, par madame Andromeda vous avez entendu et congneu que non seulement il n'appartient, et n'est honneste aux jeunes femmes, mais ne aussi assez prudemment besoigné de recalcitrer au [x] premiers mouvemens de l'Amour vainqueur des Dieux et des hommes, et que par la deduction de ses raisonnables, apparens et vrays propos elle a playnement (comme je cuiyde) l'opinion heretique de madame Cebille confondue : neantmoins, puisque nous sumes venues en nostre renc d'interposer quelle chose sur ce nous en sentons, liberement sans craincte avoir des malle[s] mesdisances des iniques ennemis d'Amour devant vostre noble consistoire, je diray à deux motz par ung petit compte advenu mesme en ceste ville qu'il n'est seurement faict, ny de bon sens de rejecter improbement ceulx qui de tout leur cueur nous ayment par le vouloir et commandement du Saint Amour. (pp.157-158)

従って、メリディエンヌ、ナルキッソスその他の、ウェヌスの力に従わず、愛を寄せるものを退けるつれなき者が罰せられることになる。またセビルのようにこの教えに反抗するものこそが異端であり、愛する人を片意地に拒絶することは正気でない。

先に見たようにフローレスにおいては、快楽や欲望に結びついた愛は厳しく非難されるのだが、その非難の根拠となるのは、キリスト教的な倫理である。Matulka が言うように、「フア

ン・デ・フローレスは「ウェヌスの虜人」を許さず、教会と道徳の規則に反するときは罰するのである。』¹⁵⁾ 罪と地獄の存在を信じるフローレスにとってはフィアンメッタもパンフィロも単に愛する人ではなく罪人なのである。¹⁶⁾ こうしたフィアンメッタの罪の意識はフランス語の訳では次のように表現されている。

Mais je chercheray mille morz pour payer une si douteuses vie, à celle fin que plusieurs foys je meure, et plusieurs foys je me puisse venger de toy, et que mes fautes, qui ont donné mauvais exemple, et mes peines, et tourments, leur soient pour mirouer. Et pource que il est necessaire de chercher remede pour satsfaire à mon mary, d'autre plus aigu cousteau, que pour Pamphile, je veulx executer, et à cause de l'adultere je delibere pugnir mon crime et offence par les plus cruelz bourreaulx que me sera possible. (p.474)

フィアンメッタは自分の行為を過ち *fautes* として意識しており、夫に対する不義 *adultere* のゆえに罪と侮辱 *crime et offence* を自ら罰して死のうというのである。かくしてパンフィロに最終的に見捨てられフィアンメッタは死を選び、永遠の劫罰に処せられる。

パンフィロも情熱でフィアンメッタを道に迷わせたことによって一層深い罪人であるが、このことはフィアンメッタの幻影の場面によって最も明瞭に表現されている。Matulkaによれば、この幻影の場面は エロスの地獄における懲罰の一種であり、中世においてヴァンサン・ド・ボーヴェやカペラヌスに先例が見られ、後に検討するボッカッチョの話もその流れの中にある¹⁷⁾。

セーヴのフランス語訳では、改悛したパンフィロとともに砂漠に引き籠もったグリマルテは暗黒の夜にまずフィアンメッタのぞっとする叫び声、苦しみうめく声を聞く。近寄って、ゆがんだ顔の、口、耳、目から地獄の炎を噴出す者どもに裸の彼女が苦しめられているのを目にする。グリマルテはこうしたフィアンメッタを救いたいと思うが、その力がない。やがてこの者どもは苦悶するフィアンメッタを鋤 *cherrue* の上に据えて、二頭の黒い馬に引かせる（スペイン語では *carro* で荷車のはずであり、クレチアン・ド・トロワの『ランスロまたは荷車の騎士』に見るごとく、辱めの道具である。Huguet は *cherrue* を *charrue* の意味としている）。そこでのフィアンメッタを苦しめる道具については語られない。こうした姿を見たグリマルテは恐ろしく思い、苦痛を禁じえない。そしてこの情景はパンフィロにとって一層辛いものである。

et apres ainsi estre mise toute nue, monstrerent à Pamphile, comment sa descongnoyssance l'avoit mise et muée, de ce qu'elle souloit estre. Et je dis en verité que (selon que par veue j'ay peu congnoistre) ce estoit la mort, ou ses effectz sembloit, et plus horrible que les raiges infernalles se monstroit de telle sorte. De autant qu'elle me sembloit en sa vie gracieuse et allegre, d'autant plus elle me donnoit de peine à ceste heure là à la veoir, dont je ne scay que dire, car en toute ma vie je ne scauroye suffire à racompter ce que de sa figure m'apparoissoit. Et apres qu'elle eut donné à congnoistre à Pamphile combien l'amour d'elle estoit envers luy, et ayant passé par tant de mondes pour son amour, et combien elle souffroit pour luy, à celle fin qu'il recordast s'il souffroit la

moytié de ce que sa cruaulté meritoit, en especial pource que la desesperée mort de Flamette estoit condampnée aux peines infernales à tousjourmais, et Pamphile payoit sa penitence en ceste briefve vie mondaine, pour laquelle amour il a eu ce que d'amours se merite, et au besoing n'a voulu avoir pitié d'elle, que au moins il voulust prendre pitié, laquelle certes il avoit grande comme pour certain j'apperceuz en luy l'avoir telle que ung bon cueur pitoyable doit avoir. (pp.506-507)

こうしてこの作品における幻影は明瞭にフィアンメッタとパンフィロ両者にとって懲罰の意味を持っている。フィアンメッタは官能的で異教的なふるまいのために地獄の苦しみを味わい辱められている。一方変わり果てたフィアンメッタの苦しむ姿を目撃しなければならないパンフィロは、フィアンメッタの行為を思い出し、フィアンメッタに名誉、生命、魂を失わせるように仕向けたつれなさのために明らかに罰せられている。

このように『フィアンメッタの痛ましい最期』では、肉の快楽に関係する、行き過ぎた愛やつれなさはキリスト教のモラルによって罰せられる。

これに対してフロールの世界はまったく異教的である。そこでは官能的な恋愛が一途に称揚されて、それに対しては何らの後悔も罪の意識も引き起こされない。先にも述べたようにむしろウェヌスの力に従わない方が罪であり、従わない者が罰せられる。このことは『デカメロン』第5日第8話から借りてきたナスタジヨの話に最もよく現れている。この話は先のフローレスにおける幻影と同様、エロスの地獄における懲罰の、今ひとつのヴァリエーションである。フロールはボッカッチョの挿話をほぼ踏襲し、ナスタジヨは求愛をどうしても受け入れなかったトラヴェルサーロの娘に、金曜日の昼間、松林で幻影を目撃させるが、そこでは黒い馬に乗った騎士がかって自分につれなくした娘を二頭の犬に襲わせる恐ろしい場面が繰り広げられる。しかしフロールは騎士に次のように言わせる。

Ceste cy par son orgueil et cruaulté m'a conduit en l'aymant à ceste malheureté, que par impatience je m'ostay la vie cruellement me transperçant le cueur de la mesme espée que je tiens. Dont me convint descendre aux enfers, où le juste juge Minos prenant douleur de ma desaventure, commanda à la Parque Antropos de tost rompre le dernier fil de ma cruelle amye. Cella faict, la cause d'entre nous deux jugée, fut conclut et arresté par arrest que à jamais je la poursuyvroie ca sus en ce monde comme ennemy pour la deffaire, et luy arraicher ce cruel cueur hors du ventre : et qu'elle à tousjours demeureroit en celle peyne en mourant de mille mors, comme celle qui avoit indigné les hautes puissances d'Amour en se resjouyssant de mon trespas avancé. (pp.187-188)

このように『アモルの罰』では自殺した騎士は地獄へ落ちるが、そこはミノスの支配する冥界である。そしてパルカのアトロプスがつれない恋人の命の糸を切る。そしてこの娘は、騎士の早まった死を喜んでアモルの全能を侮辱したゆえに罰を受けるのである。フロールは『デカメロン』の話にほぼ忠実であるが、この部分では大いに異なり、キリスト教的要素を全く排除している。すなわちボッカッチョは、騎士を自殺の咎で永遠の劫罰にかけ、つれない娘を残忍

性と苦しむのを喜んだ罪によって地獄の罰に処し、悔い改めにも言及していたのだ¹⁸⁾。

さらにこの話が『アモルの罰』の最後のものであり、トラヴェルサーロの娘は幻影を目にしてつれない態度を変え、ナスタジヨを受け入れることにも注意を払う必要がある。パンフィロとフィアンメッタの恋愛は末尾の幻影の挿話によってキリスト教的解釈が強化され、グリマルテのグラディッサに対する恋愛にも終止符が打たれる。他方『アモルの罰』の最初の三話では、つれない男女はその高慢さによって身を滅ぼしたが、最後の話で、愛を寄せる人を拒絶すべきでないという、これまで語り手が繰り返してきた教えが実現されて、語り手の話を締めくくるが、なおも考えを変えなかったセビルが罰せられて、物語全体が終わる。このように幻影の挿話は起源を同じくするだけでなく、フローレスとフロールの二つの物語のなかでの位置や機能においても類似したものを持っている。

最後に結婚との関係で二つの物語を比較してみよう。中世の聖職者が独身を称揚したのに対して、十六世紀には、エラスムス、ヴィヴェースらのキリスト教的ユマニストが結婚を復権させており、結婚は当時の女性論争において重要な主題の一つであったのだから¹⁹⁾。『フィアンメッタの痛ましい最期』には結婚に関して、まとまった具体的な記述はない。しかし先に引いた引用の中に、「夫の正しい愛」や「貴い夫と素晴らしい家を打ち捨てた」という言及が見られ、パンフィロの口からフィアンメッタの行為は夫の名誉を傷つけるものだと非難させていることを考えると、フローレスは結婚を暗い情熱である恋愛に対立させて肯定的に考えていたと思われる。

予想されることだがフロールにおいて様相は全く異なる。先の第四話での結末は次のようになる。

Par ce moyen obtint Nastagio de ses douces amours la jouissance. (p.191)

つまり『アモルの罰』ではナスタジヨはトラヴェルサーロの娘から恋愛の果実をまふまふと手に入れたのだが、『デカメロン』においては二人は結婚で結ばれて幸せな結末を迎えていた²⁰⁾。フロールは結婚に何ら言及せず、恰も恋愛と結婚は両立しないかのように、甘美な恋愛の享受のみを述べる。この非結婚の態度には相応の理由があり、ミネルヴは次のように述べる。

Le plus souvent nous sommes par le vouloir et choix de noz parens jointes par l'adamantin lien de mariage à vieillars chanuz qui ont jà ung pied en la fosse : et avec ses coprs de glace non(sic) [nous] sommes contraintes user noz malheureux ans, en quelle peyne dieu le scait. Dont n'est de merueille si noz beaultes descheent plus tost que ne faict la tendre rosée de may: et si au matin nous levant d'emprès ces beaulx et elegans maris, c'est à scavoir noz faict on si mauvais veoir. Combien que encores la chose seroit tollerable s'ils avoient tant soit peu de vigueur en leurs debiles corps comme de satisfaire sinon en tout, aul moins en partie à cella, on gist tout le bien de ceste mienne passante jeunesse. Et non sans cause s'en complaint une noble, excellente et jeune Dame en ceste sorte : (pp.167-168)

当時しばしば見られた、本人の意志によらない、年齢のかけ離れた老人との金銭づくの結婚の姿が描き出されており²¹⁾、こうした結婚が若者の官能的恋愛と相容れないことが、『アモルの

罰』での非結婚の主張となる。さらに老人のおぞましい姿は第二話で詳細に描写されている。付言すれば『恋の物語』に追加された三つの話はいずれも嫉妬深い夫が罰せられることを主題とする点で共通している。

以上のような分析により、『フィアンメッタの痛ましい最期』と『アモルの罰』が、冒頭の詩句だけではなく、物語全体においても類似した構成を持ち、そして恋愛の対照的な姿を提示していることが了解されよう。それでは、こうしてより一層明瞭となったフロールの語る、官能的で異教的な、結婚と結びつかない恋愛は、レイノルズ＝コーネルの言うように、男に都合の良いものであり、書き手は男性が変装しているのだろうか。必ずしもそうとは言えない。

確かに結婚の絆で結ばれない官能的な愛は男性の利益となりやすいであろう。しかし語り手の述べるモラルをより詳しく検討すれば、そこにはまた別の様相も見える。メデューズは第二話の女性の青春を次のごとく結論する。

Si advint, cheres et amouruses Dames, que la pouvre mal advisee consuma la pluspart de ses florissants jours, et que sa verdoiante jeunesse fut, ne scay comment, certes plus que pouvrement et malheureusement despendue, sans considerer que la chose plus heureuse et aymable de ce monde, c'est de convenir en esgualite d'amour adolescente ? (p.159)

この節の最後に見られるモラル、「この世で一番幸福で愛すべきことは青春の恋で平等に結ばれること」は、先にミネルヴが提示した結婚の姿が、当時の実態をかなりの部分反映したものである以上、現代における意味合いとは異なって、フェミニスト的主張と解すべきである。そしてロズモンドも同様に「相互の愛で愛さなくてはならない」Que vous les devez aymer de mutuelle amour, l'exemple que j'ay recite voz le monstre assez : (p.181)と恋愛の相互性を聞き手の女性たちに語っている。

こうしたフェミニスト的側面は例えば女性の教育を述べた次の箇所にも窺われる。

La jeune fille dès sa naissance fut delicieusement avec grande sollicitude nourrie de ses parens, et enseignée en toz genres d'estude feminin : de maniere qu'en bien dire elle surpassoit Hortensia romaine, en poesie la noyrette Sapho, en bien chanter et jouer du leuth le filz d'Apollo et les Sereines, a basler et dancier Hebe la jeune fille de Juno. Aussi s'il eust convenu dresser une contention de tiltre et besoigner de l'esguylle, ja n'eust elle esté vaincu, ne receu la peyne de l'arrogante Arachnes. (p.158)

ここで注目し得るのはこの女性に与えられる教育への言及の順序である。伝統的に女性に割り当てられた役割である針仕事は最後にまわされ、当時の女性には最も縁遠いものと思われる、雄弁、詩が第一に来ている。これは現実の姿を写したというよりは、男性と同等の教育を受けるべきとの、フェミニスト的主張の現れと解することができる。

モーリス・セーヴは『フィアンメッタの痛ましい最期』の冒頭に付した書簡で次のように語っていた。

Toutesfoys ayant secouru tempestueuse fortune, et comme bon et expert marinier en la naufrageuse mer d'amour, et eschapé que fus d'icelle vous ay bien voulu communiquer ce present livret, tant pour estre la matiere semblable à mon propos, que aussi par plus prouvée histoire vous enseigner à cauteusement aymer, qui n'a aymé, et saigement desaymer, qui es lacs de ce cruel tyrant amour est entreprins. (p.425)

ソーニエの言うように、セーヴのこの書を世に送る意図が、無分別な恋愛に警告し、あるいは治療するために、読者を教え、教化すること²²⁾、「慎重に愛することを教えること」にあるならば、フロールは、恰もこの教えに真っ向から反対するかのようである。この対照を当時の女性論争のなかでのゲームと捕える立場もありえよう。しかしそれでも、『アモルの罰』に表現されている、異教的で自然な官能的恋愛、結婚と関連づけずに称揚されたこの恋愛、そこにフェミニスト的側面をも認めることは十分に可能であろう。(2004.10.26)

註

- 1) Madeleine Lazard, <II.Étude littéraire D.Le féminisme>, dans Gabriél-André Pérouse et al. (éd), *Contes amoureux par Madame Jeanne Flore*, Éditions du CNRS/Presses universitaires de Lyon, 1980, pp.32-37
- 2) Régine Reynolds-Cornell, 《Madame Jeanne Flore and the Contes amoureux : A Pseudonym and a Paradox》, in BHR, vol.LI, 1989, pp.123-133
- 3) Barbara Matulka, *The Novels of Juan de Flores and Their European Diffusion*, Institute of French Studies, 1931, p.198
- 4) La Deplourable fin de Flamecte, elegante invention de Jehan de Flores espagnol, traduite en langue francoyse, SOUFFRIR SE OUFFRIR, Lyon, Fr. Juste, 1535
Id. Paris, Denys Janot, 1536.
- 5) *La déplorable fin de Flamete*, in Maurice Scève, *Œuvres complètes*, texte établi et annoté par Pascal Quignard, Mercure de France, 1974, p.426。以下この作品への言及はこの版により、頁数のみを引用の後に記す。なおこの作品はEpistemon上でも公開されている(<http://www.cesr.univ-tours.fr/Epistemon/cornucopie/flamete.asp>)。
- 6) Gabriél-André Pérouse et al. (éd), *Contes amoureux par Madame Jeanne Flore*, Éditions du CNRS/Presses universitaires de Lyon, 1980, p.95。以下『恋の物語』『蔑ろにされたアモルの罰』への言及は、参照の便のために、この版の頁数を引用の後に記すが、『蔑ろにされたアモルの罰』の綴り字はフランス国立図書館所蔵の版に従う。
- 7) Gabriél-André Pérouse et Denis Baril, 《II. Étude littéraire A.Le milieu》, Gabriél-André Pérouse et al. (éd), *Contes amoureux par Madame Jeanne Flore*,

Éditions du CNRS/Presses universitaires de Lyon, 1980, p.22.

- 8) Yoshihiro KAJI, «Étude sur *les Comptes Amoureux* - Recherche de la date de publication des *Comptes Amoureux* portant la marque d'Icare, plus précisément la marque de Dédale, comme l'indique Rawles», in GALLIA, XLIII, 2003, pp.1-7.
- 9) *Complaincte tres piteuse de Flamette a son amy Pamphile, translatee d'Italien en vulgaire Francoys*, Paris, Jehan Longis, 1532
Flamette, *Complainte des tristes amours de Flamette a son amy Pamphile, translatee d'Italien en vulgaire Francoys*, Lyon, Claude Nourry, 1532
Id., Lyon, Fr. Juste, 1532
Compliancte tres piteuse ..., le tout revu et corrigé, Paris, Denys Janot, 1541
- 10) op.cit., pp.306-308.
- 11) Ibid., p.324
- 12) Ibid., p.323
- 13) Ibid., p.322
- 14) cf. Daniela Rossi, «Erotismo e sensualità ambientale nei «*Comptes amoureux*» di Jeanne Flore». in *Nouvelles françaises à la Renaissance*, Étude réunis par Lionello Sozzi, Slatkine, 1981, pp.285-295
- 15) op.cit., p.324
- 16) Ibid., p.322
- 17) Ibid., p.295 sq.
- 18) Boccaccio, *Decameron*, a cura di Vittore Branca, Arnoldo Mondadori, «Osacar Classici Mondadori», 1989, p.484 «e per la sua fierezza e crudeltà andò sì la mia sciagura, che io un dì con questo stocco, il quale tu mi vedi in mano, comme disperato m'uccisi, e sono alle pene eternali dannato. Né stette poi guari tempo che costei, la qual della mia morte fu lieta oltre misura, morì, e per lo peccato della sua crudeltà e della letizia avuta de'miei tormenti, non pentendosene, come colei che non credeva in ciò aver peccato ma meritato, similmente fu e è dannata alle pene del Ninferno.»
- 19) Madeleine Lazard, *Les avenues des femynie Les femmes et la Renaisssance*, Fayerd, 2001, p.37 sq.
- 20) Boccaccio, op.cit., p.487. «Alla qual Nastagio fece rispondere che questo gli era a grado molto, ma che, dove le piacesse, con onor di lei voleva il suo piacere, e questo era sposandola per moglie. La giovane, la qual sapeva che da altrui che da lei rimaso non era che moglie di Nastagio stata non fosse, gli fece risponder che le piaceva. Per che, essendo ella medesima la messeggera, al padre e alla madre disse che era contenta d'essere sposa di Nastagio, di che essi furon contenti molto.

E la domenica seguento Nastagio sposatala e fatte le sue nozze, con lei più tempo lietamente visse. »

- 21) Madeleine Lazard, *Les avenues des fémynie Les femmes et la Renaissssance*, Fayerd, 2001, p.46
- 22) Verdun -L. Saulnier, *Maurice Scève, 1948-1949* (Slatkine, 1981), p.56.

Étude sur *les Comptes amoureux* (3)

KAJI Yoshihiro

Nous avons examiné le thème de l'amour dans *les Comptes amoureux* ou plutôt dans *la Punition de l'Amour contempné* en le comparant avec celui dans *la Déplourable fin de Flamecte*, traduction par Maurice Scève de *Grimalte y Gradissa* de Juan de Flores. Ce choix est justifié par la ressemblance des noms de l'auteur, Juan de Flores et Jeanne Flore, par le fait que ces deux œuvres ont été publiées par les deux mêmes imprimeurs, et enfin et surtout par les deux huitains placés au début de chaque œuvre.